

差引遺族贈呈料

五圓九拾五錢

(四)

故植村秀男君弔慰金

金參拾錢

萩野 上風

金壹圓

牧野 春雄

田中 秀吉

坂路 善一

野口新太郎

飯田 四郎

山本奈良三郎

依田實之助

小山 俊吾

金貳圓

村島 徹

佐藤 一

小林 榮夫

金五圓

河西 尙一

合計

拾九圓參拾錢

差引遺族贈呈料

拾九圓參拾錢

編輯後記

編輯なんて奴は以前から計画的に決して出来るものでない。なんでも其の眞極へ来て所謂不眠不休でパタパタと片付けるべきものであるらしい。

第一原稿を集めるのにとてもの苦勞である。何度も何度も催促をして義理といふ欄に攻めつけ、嫌味やお叱言を云はれつゝ難有く丁殿する。夫れも大抵の場合は其の眞極でなければ殿けない。

實は斯く云ふ編者も亦其の眞極でなければ却々書かない。結局如何しても發行の眞極、匆忙の中に編輯をせざるを得ないといふ結果に墮するのである。

今回は丁度此の貴重な眞極へ来て、代議員會、講演會、を持ち込み、しかも是を本號へ登載しやうとしたから、一層忙がしくなつて了つた。發行の後れた理由と、杜撰な理由とを開陳すればザツトこんなわけである。

本號は割に説苑が少なかつた。實は此の方面の原稿が欲しいのである。特に勝木博士から有益なる原稿を御送り下さつた事に對して深甚の感謝を表する次第である。

學校と云ふものを成るべく同僚各位に想起して戴きたいと云ふ考へから憶想録の幾つかを集め、尙且つ新らしく學校がスウエルした個所の寫眞をも載せた。寫眞は悉く依田、竹内、山口、三氏の手を煩したものである。

滑り上げて見ると本號はいさゝか消極的に墮した感があつて、小見氏の所謂「相互の教育機關たらしむること」と云ふやうな積極的な使命を没却したかのやうに見える。更生してから未だ二才のいたいけない嬰兒であるから、教育の方針によつてはどつちにでもなる。如何かして一步進んだ積極的の理想に突進したいのであるから忌憚なき御批判と遠慮なき御叱諤とを願ひたい。そして原稿を御裏投下さらんことを切に冀つて止まない次第である。

世は十二月の寒空となつた。上田を繞る山々は已に白装をこらしめてゐる。本號が諸兄の手に入る頃は昭和四歳ももう眞近であらう。謹しんで舊新年の御送迎を祈り擱筆する。(三、一二、編者)